れきはく通信 第３号

発行：新潟県立歴史博物館
（編集　岩瀬春奈）
2025 年 2 月 15 日

『高志路』掲載の馬高遺跡

新潟県立歴史博物館に近い長岡市関原町の馬高遺跡は、火焔土器のニックネームをもつ縄文土器が発掘された地として知られる。三十稲場遺跡とともに昭和 54 年（1979）2 月 21 日、国の史跡に指定されている。馬高遺跡（縄文時代中期）と三十稲場遺跡（縄文時代後期）とは谷を挟んで隣接する。馬高遺跡には、墓穴などの残る中央広場を取り囲むように住居の見つかる環状集落が 2 つ存在し、5,000 年前頃と 4,500 年前の頃の生活痕跡を留めている。火焔土器をはじめとする出土品は平成 2 年（1990）6 月 29 日、国の重要文化財に指定されている。いまや馬高遺跡の代名詞となっている火焔土器であるが、当初はさほど注目されておらず、土製品のひとつ滑車形耳飾りに注意は向いていた。

馬高遺跡を探査していた近藤勘治郎（1882－1949）・近藤篤三郎（1907－1945）が昭和 11 年（1936）10 月、東京考古学会発行の『考古学』第 7 巻 10 号に発表した「越後馬高遺跡と滑車形耳飾り」がそれをよく示している。近藤勘治郎は続けて昭和 12 年（1937）6 月発行の郷土雑誌『高志路』第 3 巻第 6 号に「三島郡馬高に於ける石器時代（付 滑車型耳飾に就いて）」を巻頭口絵写真とともに寄せる。小林存（1877－1961）が昭和 10 年（1935）に創刊した『高志路』は、新潟県民俗学会の組織後、その機関誌となる。しかし創刊直後の『高志路』は土俗学、人類学、考古学などを総合した郷土雑誌であった。そこで近藤勘治郎が論じた事績は注目に値する。当時、縄文時代という時代区分はなく、日本石器時代と呼ばれていた。その年代的推移を見通す基準として、そのころに確立したばかりの縄文土器の相対的年代序列を参照し、越後馬高遺跡の滑車形耳飾りが、関東の遺跡出土の滑車形耳飾りよりも古いものであることを論じている。その見解は当時の最高水準の研究成果である。その掲載誌『高志路』は越後の誇る学術雑誌であった。（宮尾亨）

八十里・六十里を越えて－仕事着からみえる地域のつながり－

福島県南会津郡只見町は、民俗担当の学芸員で知らない人はいない町といえるのではないでしょうか。地域の人々が自らの手で道具を集め整理し、その情報とともに資料化する、いわゆる「只見方式」と呼ばれる資料収集によって、町ひとつ分の大きな民俗資料群を形成した地域です。その丁寧な仕事ぶりによって資料の一部は「会津只見の生産用具と仕事着コレクション」として国指定重要有形民俗文化財となりました。また 2022 年には、ただみ・モノとくらしのミュージアムが開館し、国指定文化財を収蔵する収蔵庫と併設して博物館が設置されました。今回は 2024 年 7 月 20 日～2025 年 2 月 11 日まで開催されていた企画展「奥会津の着る民具（モノ）－糸づくりから現代まで－」を観覧してきましたので、そこから新潟県との繋がりを紹介します。

企画展では、製糸用具、国指定重要有形民俗文化財コレクションの一部である仕事着、現在も地域で活動している南郷刺し子会の作品が展示されていました。奥会津地域では麻などの植物繊維を利用した糸から織物が作られています。この麻織物は新潟県では縮として知られ、越後上布・小千谷縮として重要無形文化財に指定されています。現在、越後上布・小千谷縮の製作で使われる原料の青苧は、主に福島県大沼郡昭和村で生産されています。隣接する只見町の製糸用具はこの地でも苧麻生産が盛んであったことを伝えています。木綿の仕事着には、八十里越を通して伝わった加茂縞が使われていました。ここからも新潟との繋がりを知ることができます。また、只見で「クモッケツ」と呼ばれるゼンマイ採り用の仕事着は、新潟から伝わったものと紹介されていました。これは魚沼市などにもみられる「ブイトウ」と同じものです。六十里越を通して伝わったのでしょうか。

ひとつの仕事着から今後の課題の発見と地域との交流を見つけ出すことができました。同じものに出会う瞬間が民俗学の最大のおもしろさです。　　（岩瀬春奈）

館内で外来カメムシを発見!?

博物館には虫に敏感な学芸員がいる場合があります。博物館では様々な資料（史料や試料を含む）を収集・保存し、調査研究し、展示、教育普及などに活用しています。活動の基礎となる資料の劣化を最小限に抑え、価値や魅力を伝えていくことが博物館には求められます。劣化の原因は様々ですが、資料を食害し汚染する虫は博物館にとって大きな脅威です。虫はただその生態に従って生きているだけですが、博物館にいては困る虫（文化財害虫）もいるのです。そのため、当館ではこうしたリスクを管理する担当者が置かれ、ここ数年は私が担当しています。館内に複数の粘着トラップを設置し、「いつ、どこで、どんな虫が」捕獲されるのかを把握し、殺虫などの対処を考えます。さらに職員だけでなく博物館にかかわるなるべく多くの方に、館内で虫を見つけたら報告してもらっています。

今回紹介するカメムシは、館内で捕獲された外来種でマツヘリカメムシといいます。国内では 2008 年に東京都で報告された後、15 年あまりで本州～沖縄まで分布範囲を広げ、県内でも十日町市の「森の学校」キョロロで令和 4 年に館内で捕獲されたことが報告されています（大平創・加藤大智 2023「新潟県十日町市におけるマツヘリカメムシの初記録」『「森の学校」キョロロ研究報告』４）。

令和 6 年 10 月 31 日撮影

当館でも昨年から越冬のため館内に侵入した本種の発見が増えています。マツヘリカメムシは文化財害虫とは言えませんが、松の害虫であり周辺植生への影響なども心配されます。今回の気づきも館内に侵入した虫に注意を払ってきたことによります。本エッセーをご覧になった皆様も博物館で虫を見つけたら必ずお知らせ下さい。

（橋詰　潤）

～編集後記～

今回掲載した「『高志路』掲載の馬高遺跡」で紹介された重要文化財「滑車形耳飾り」は、新潟県立歴史博物館の令和６年度冬季テーマ展「生活の証拠品が民具である　山口賢俊がまもったコレクション」で展示されます。展示期間は、２月８日（土）～３月23日（日）です。ぜひお越しください。

「れきはく通信」に関するご意見、ご要望は、新潟県地域史ネットワークニュース事務局までご連絡ください。

事務局メール　net@nbz.or.jp